

## 津山の弥生土器 2（甕形土器・高坏形土器）

中山 俊紀

### 前期の甕形土器

津山では、天神原遺跡、高橋谷遺跡、京免遺跡等で前期の土器が発見されている。いずれの土器も前期後半に属するもので、前期前半に遡るものは、今のところ発見されていない。

各遺跡で発見されている甕形土器の基本的な形は、縄文土器以来の深鉢形を呈する。これらは口縁部断面が如意形を呈するもの（A）と、断面三角形の貼付口縁帯を有するもの（B）の二種に大きく区分される。Aは、口縁部に沈線を巡らすものと無文のもの2種があり、Bはほぼ例外なく沈線を巡らしている。この沈線文は、天神原遺跡出土のものでは2～3条で、幅の太い線をもつものが含まれ、京免遺跡出土のものは、多条化して10条前後を巡らしている。

継続形集落である高橋谷遺跡出土のものには、さらに本数の多いものもあり、沈線の多条化は、おおむね時期的推移を示しているとみてよい。

### 中期の甕形土器

深鉢形の甕は中期前葉までみられるが、口縁部下の沈線文が櫛状の工具によって施文されるように変わる。高橋谷遺跡では、この櫛描文の条痕に櫛の目の荒い沈線文風仕上げのもの少数と、櫛目の細かいいわゆる櫛描文風のものがある。前期からの施文の変遷に位置づければ、前者は櫛描文化した甕のなかでもより先行することが推測されるが、今のところ資料点数は少なく、現状でははっきりしない。

中期前葉から中葉にかけ、胴部が卵形を呈する弥生形甕（C）が出現する。Cは、法量で大（C<sub>ℓ</sub>）中（C<sub>m</sub>）に区分できる他は、いずれもくの字口縁を呈する単純な形態のもので、施文及び口縁端部のそりや、わずかな肥厚によって特徴の差が認識されるにすぎない。

中葉の後半には、この甕に加え、口縁部を上下に拡張し、端面に凹線を巡らす弥生形甕（D）が追加され（D<sub>ℓ</sub>、D<sub>m</sub>）、後葉になると甕Cが衰退し、甕Dが優勢となる。

### 後期の甕形土器

後期前葉は、中期末の様態を受け継ぎ、甕Dが主流を占める。また、小形の甕D<sub>s</sub>が普遍化する。前葉末から中葉になると、中期以来の系統変化を主要因として成立する二重口縁の美作形とも呼ぶべき形態の甕が形成されてくるとともに、山陰の九重式の影響を受けた二重口縁で、口縁外面に櫛描平行沈線文を巡らす出雲形甕が、特定の遺跡で集中して発見されるようになる。

後葉になると、播磨や但馬地方の影響とみられるタタキ成形を特徴とする播磨・但馬形甕が、市内東部を中心に目だちはじめ、さらに後葉から終末期には、山陰地方に広くみられるような薄手のシャープなつくりで、肩部に平行櫛描文や櫛描波状文を伴う伯耆、因幡形甕が多く発見されるようになる。

なお、細部は煩雑になるため割愛するが、外来要素により区分した甕も、現実にはそれぞれの相互変容の結果、多様な変異群として存在するということは注意しておきたい。

## 中期の高坏形土器

中期前葉以前の高坏形土器は、断片的な資料しかないため、中期中葉以降の高坏について概観する。

中期高坏は、椀形坏を基本とする。口縁部の形態により、端部肥厚形と、その亜形とみられる端部T字ないしはIの字形断面を呈する端部拡張形、鐙形高坏、および端部逆L字形高坏に大きく3区分される。

端部肥厚形高坏は、中期後葉に形態分化がおこり、坏部が強く屈曲するものが出現する。この分化と同時に、端部肥厚形高坏及び鐙形高坏に大形個体が出現する。次回にふれる器台形土器の大型化とともに、高坏形土器の大型化は津山地方の中期後葉土器の一特色となる。

## 後期の高坏形土器

小形の端部肥厚形高坏のうち、坏屈曲の強い個体は後期に継承され後期初頭の高坏の主流となるが、若干の変異を生みながら、後期前葉には姿を消していく。

相前後して、坏中位から二段に立ち上がる二段坏形高坏が出現し、以後後期から古墳時代にいたるまで一貫した主流高坏となる。

また、遅くとも後期中葉には皿形高坏が出現し、後期末には、伯耆・因幡形高坏が出現する。

## 掲載土器出典

|                          |                               |          |       |
|--------------------------|-------------------------------|----------|-------|
| 「天神原遺跡」                  | 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7               | 岡山県教育委員会 | 1975年 |
| 「高橋谷遺跡」                  | 1975～77年にかけ津山市教育委員会が調査。報告書未刊。 |          |       |
| 「京免・竹ノ下遺跡」               | 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集            | 津山市教育委員会 | 1982年 |
| 「高本遺跡」                   | 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8               | 岡山県教育委員会 | 1975年 |
| 「沼E遺跡Ⅱ」                  | 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集             | 津山市教育委員会 | 1981年 |
| 「下道山遺跡」                  | 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17              | 岡山県教育委員会 | 1977年 |
| 「稼山遺跡群Ⅰ」                 | 久米開発事業に伴う文化財調査委員会             |          | 1979年 |
| 「大田十二社遺跡」                | 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集            | 津山市教育委員会 | 1981年 |
| 「一貫東遺跡」                  | 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集            | 津山市教育委員会 | 1993年 |
| 「二宮遺跡」                   | 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28              | 岡山県教育委員会 | 1979年 |
| 「金井別所遺跡」                 | 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集            | 津山市教育委員会 | 1988年 |
| 「押入西遺跡」                  | 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3               | 岡山県教育委員会 | 1973年 |
| 「領家遺跡」                   | 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8               | 岡山県教育委員会 | 1975年 |
| 「ビシャコ谷遺跡」                | 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集            | 津山市教育委員会 | 1984年 |
| 「一貫西遺跡」                  | 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集            | 津山市教育委員会 | 1990年 |
| 「野村高尾遺跡」                 | 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第55集            | 津山市教育委員会 | 1995年 |
| 「大畑遺跡」                   | 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集            | 津山市教育委員会 | 1993年 |
| 「西古田遺跡」                  | 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集            | 津山市教育委員会 | 1985年 |
| 「小原遺跡」                   | 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集            | 津山市教育委員会 | 1991年 |
| 安川豊史「美作国府跡出土の弥生土器」『古代吉備』 | 第17集                          | 古代吉備研究会  | 1955年 |

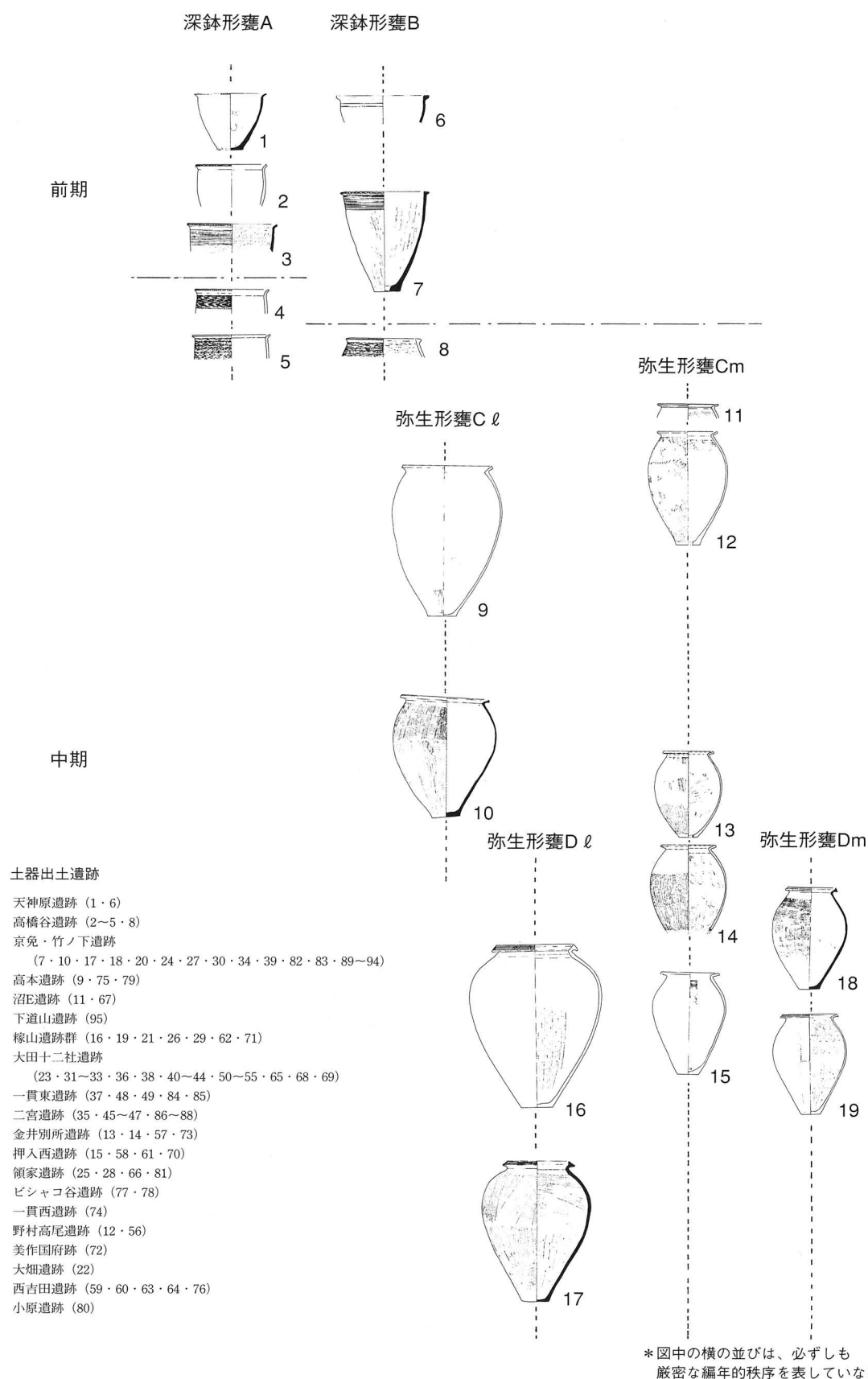
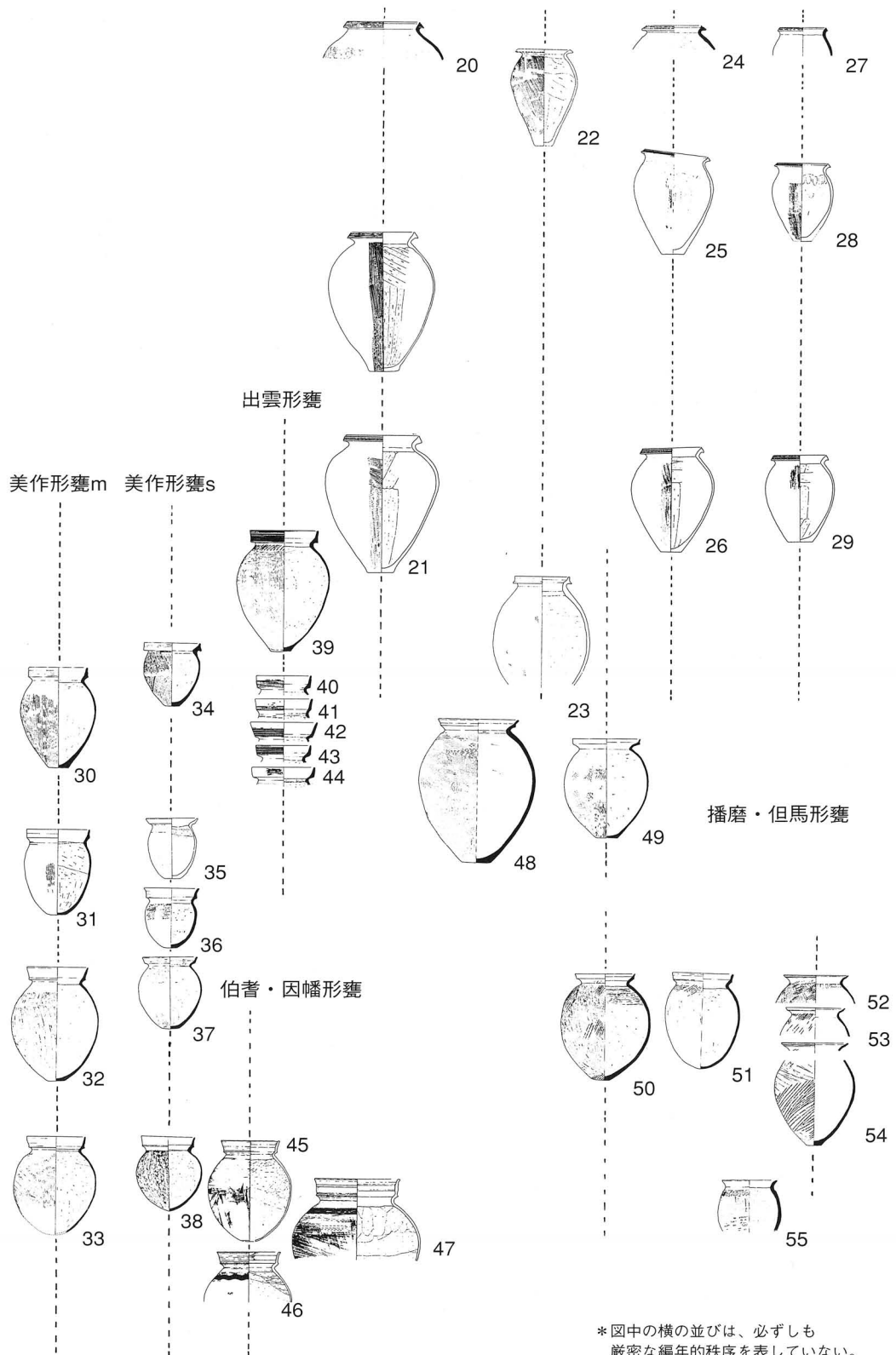


図1 前・中期の甕形土器系統想定図 (縮尺約1/16)

弥生形甕Ds



\* 図中の横の並びは、必ずしも  
厳密な編年の秩序を表していない。

図2 後期の甕形土器系統想定図 (縮尺約1/16)

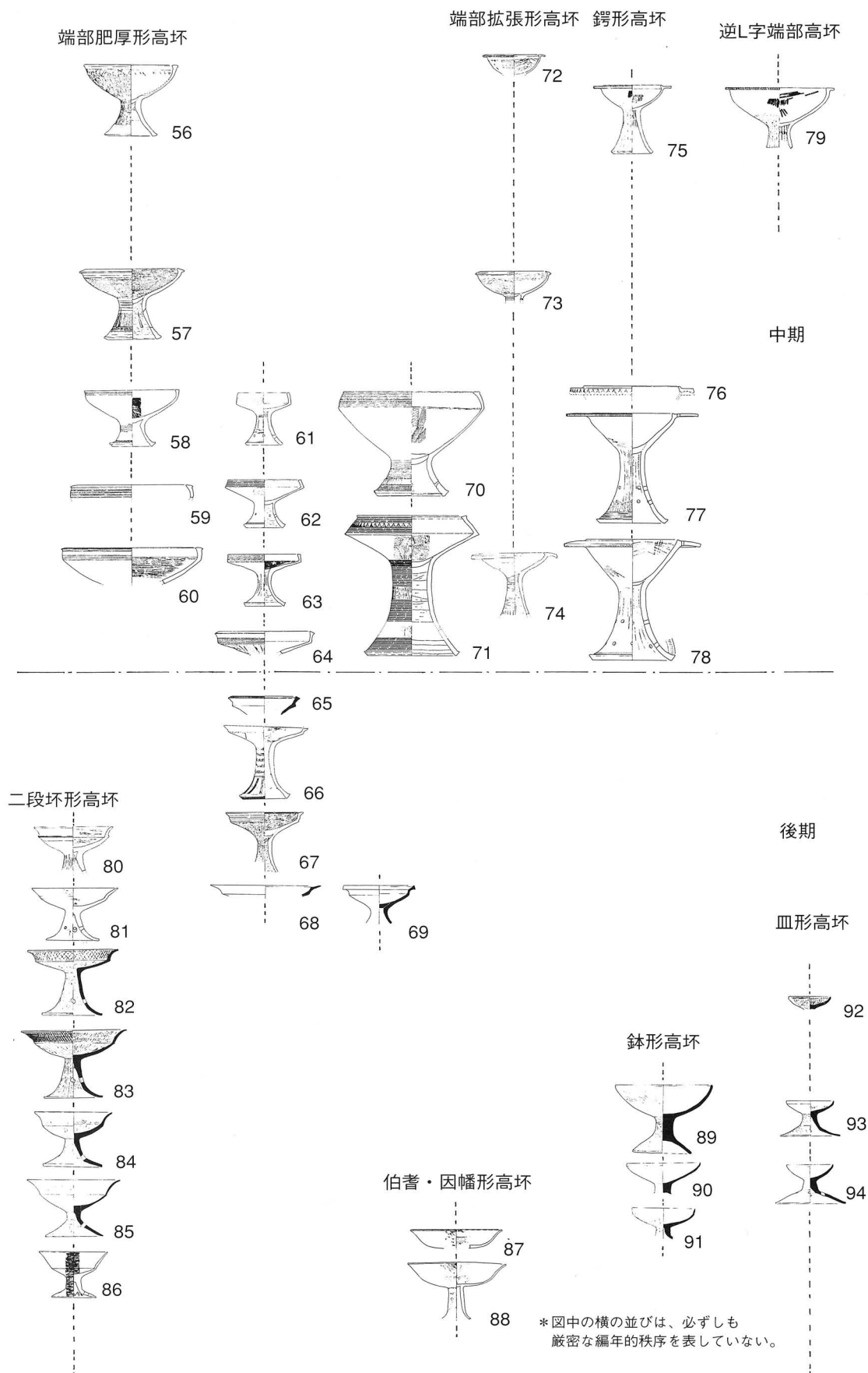


図3 高坏形土器系統想定図 (縮尺約1/16)